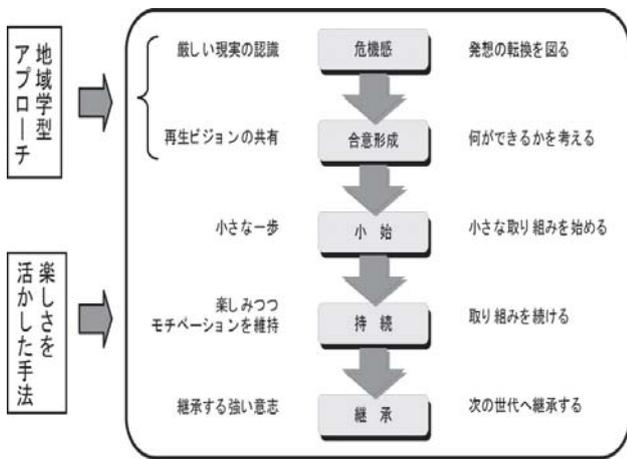


図表9 地域振興プロジェクトのプロセス



出所：日本政策投資銀行九州支店、(財)九州経済調査協会 [2005] をもとに筆者作成

ここでも、たとえば「危機感」の認識から地域の「再生ビジョン」の共有化までの段階において、地域資源の現状や課題を広く情報収集し、問題意識を共有することが必要となるが、そういったプロセスを「地域学型」の「ご当地検定」を通じて広く行うことも考えられる。また、地域振興活動を「持続・継続」していくプロセスにおいて、図表9では「楽しみつつモチベーションを維持」すべきことを指摘しているが、まさに「ご当地検定」の本質であるところの「楽しみながら地域を知る」ことと、「多くの地域に関心ある人材を蓄積する」ことを、そのプロセスに活用することができるだろう。このように地域振興プロジェクトを展開する要所要所において、「ご当地検定」の方法論が有効に機能する場面は少なくないと考えられるのである。

このように見ていくと、これから地域を振興する上で必要とされる「地域学」的取り組みと「人材育成」の取り組みを、「楽しみ」の演出において効率的に行える「ご当地検定」は、単に資格取得の手段やマニアのためのイベントという見方には収まりきらない、地域振興を実現するための運動論の根幹と深く結び付いていると考えられるべきであることがわかってくるのである。

「ご当地検定」の課題

さて、本稿では以上のように、「ご当地検定」の特徴や最近の動向、地域振興に向けた効果などを概観してきた。そのことを通じて、「ご当地検定」が多彩な展開を示していることと、「ご当地検定」が地域振興、言い換えるならば「地域力」向上のための有効な手法のひとつと考えられることが明らかになってきた。

これまでの「ご当地検定」と地域振興との関係に関する議論を整理すると、次のようになる。

- ① 「ご当地検定」は、「人材育成」と「地域学」という2つの方向性を持っており、その両者のアプローチと、そして何より「楽しみながら地域を知る」効果を通じて、地域振興プロジェクトの推進に寄与すると考えられる。ただ、2006年頃からの「ご当地検定」の急拡大以降「地域学」的傾向が強まってきている。
- ② テキスト作成など地域資源を収集、整理して提供するプロセスは相応に進んでいるものの、合格者あるいは「地域に関心のある人」を活かしていく人材活用プロセスは十分に整備されているとはいえない。
- ③ 受験者数が初年度以降急減する特徴や、ブームによる「ご当地検定」の乱立など、「ご当地検定」の持続可能性に懸念材料も少なくない。

その中で、地域振興の観点から特に重要な課題は、やはりこの取り組みの持続可能性の問題であろう。「ご当地検定」のタイプを論じるところで、本稿では採用していないが「イベント型」・「定着型」という分類があることを紹介した。地域イベントの効果をより確かなものにするために、「ご当地検定」を行うことに問題はない。しかし、持続性を確立できずに[・]_・単発「イベント型」になってしまうのでは、図表9のプロセスに照らし合わせても、地域振興プロジェクトの展開に寄与し得ない。やはり、事業が継続することにより、より多くの人々がこの問題と関わり合う関係を築くことが重要であると考えられるのである。

「ご当地検定」の活動の持続性確保には2つの側面がある。ひとつは新たな参加者をどれだけ確保できるかという問題である。実際、ブームにより、検定それ自体の